

## 「湯の街別府から」15回目「北浜に残る昭和レトロ」

湯の街別府の繁華街「北浜」には、昔懐かしい日本の昭和時代(1927～1988年)を彷彿させるスポットが幾つもある。竹瓦温泉やJR日豊線別府駅前の高等温泉、あるいは繁華街中心部にある路地裏に商店街など、街中を歩けばそこかしこにレトロの雰囲気に浸れ、それが別府温泉郷の魅力にもなっている。

別府駅東口から別府湾に向かって、坂道を下って行く途中に、昔ながらの映画館「別府ブルーバード劇場」もその一つ。市内で唯一残っている映画館で、大都市にある複数のスクリーンが併設されているシネコンとは違って、単独館だ。上映される映画は昔懐かしい題名のものばかりで、昭和時代に人気を博した「男はつらいよ」シリーズや高倉健、石原裕次郎といった往年のスターが主役の映画看板が掲示されている。



昭和時代の映画が観られる「ブルーバード劇場」

館長は岡村照さんという方で、御年90歳の粋なおばあさま。お客との対話が

生まれるという理由で、今でも両手の爪にはネイルが施されている。この方、日本シネマの世界ではちょっとした有名人で、新聞記事にもよく登場する。昨年何回か紙面でお目にかかったが、3年前の2019年11月には、当館で映画祭が行われ、3日間で20本以上が上映されたことが、地元新聞だけでなく全国紙の紙面を飾っていた。有名な俳優が連日ゲストで駆けつけ、舞台上で岡村さんの功績を称えたとも書かれている。

当人の経歴によると、18歳の時に実父が「子供に夢を与えたい」という理由で、現在地に開館したときから、映画一筋の人生を歩み続け、実父や夫の死別後も一人、映画の灯を守り続けてきたそうだ。映画の魅力や価値などに疎い筆者にとって、この映画館は敷居の高い所で、当地で暮らすようになってからというもの、まだ一度も足を踏み入れたことがない。いつも黙って昭和時代の名残がある建物に掲げられた、上映中の看板を見上げるだけで通り過ぎてしまうのだが、そういえば未だ客が吸い込まれていく姿を見たような記憶もない。根っからの映画ファンが支えているのだろうけど、コロナ禍で営業も自粛していたことだし、かなり厳しい経営ではないかと他人事ながら心配だ。



劇場の入り口。ここから2階に上がって行けば、昭和時代の映画が楽しめる

しかし、映画館の前を通るたびに昭和の匂いが漂ってきそうな建物には、なぜか郷愁の念を掻き立てられる。館内に入場しなくても別府で昭和時代を探すときには、駅前通りの「ブルーバード劇場」は見過ごしできない建物の一つだ。



昭和時代に活躍した往年のスター石原裕次郎（左）と高倉健主演の映画ポスター

もう1か所、昭和の時代を思い出させるスポットがある。「ヒットパレードクラブ」という名のライブハウスで、外観からは昭和の雰囲気は伝わらないが、中に入ってみるとタイムスリップしたように、1960年代前後の時代に浸れる。なぜ昭和時代に戻れるかと言うと、演奏される音楽が当時流行した和製のアメリカンポップスが生演奏されるから。





ライブハウス「ヒットパレードクラブ」の建物

そのライブハウスでは髪をポニーテールでまとめ、パラシュートスカートで着飾った女性ボーカルが歌う「バケーション」や「ダイアナ」、「恋の片道切符」など、オールディーズナンバーが夜中12時まで6時間たっぷり聴けて、しかも飲み・食べ放題で楽しめる。もちろんステージ前では、歌に合わせてツイストを踊る客の姿も見られ、そこはまさに昭和中期の原風景。観光で別府に来たのなら、ぜひ覗いてみたいライブハウスだ。

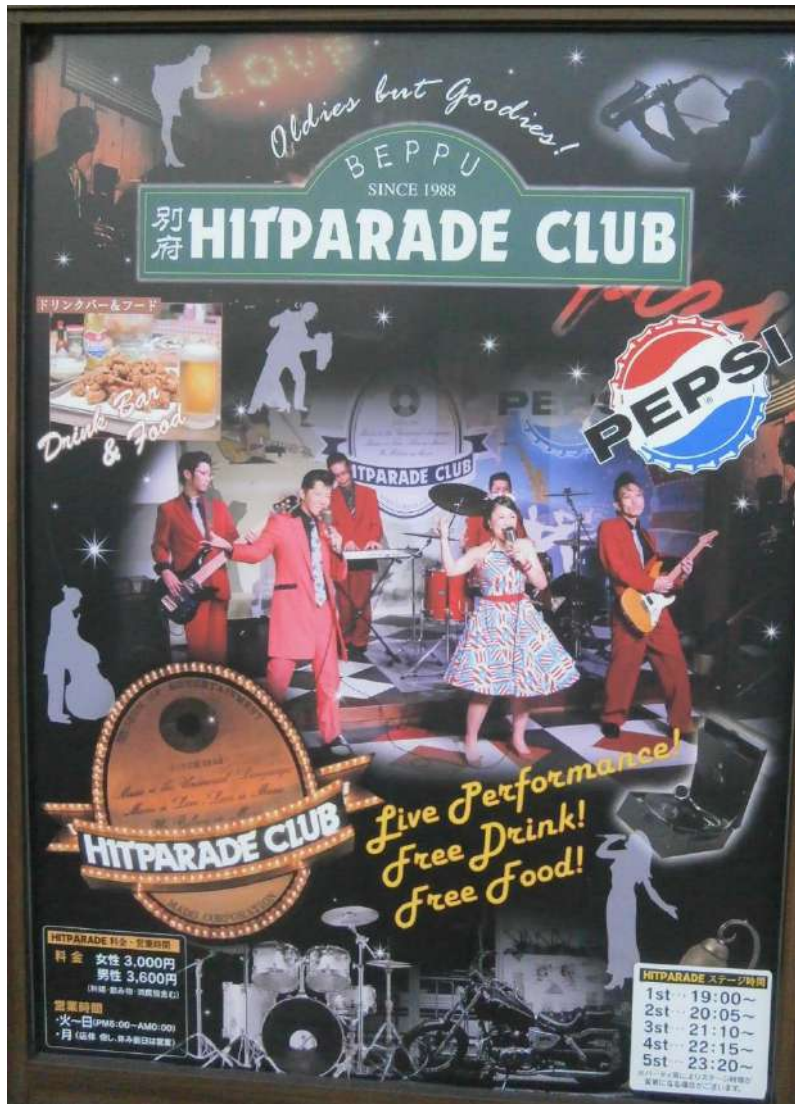


正面入り口。外観からは昭和の雰囲気は感じられないが、一歩中に入れば…

もともとはこの店、キャバレーだったという。温泉入浴に来た男性観光客を相手に、週末は大勢の客で溢れ、とても華やかな憩いの場を演出していた。現在の姿に変身したのは1988年のことで、キャバレーからライブハウスに切り替えたそう。しかも、単なるライブハウスではなく、オールディーズにこだわって、古き良き時代を再現させた。リニューアル後、何度も運営の危機にも遭い、存続が危ぶまれたこともあったが、そのたびに熱烈なファンが支援の手を差し伸べ、今日まで続いているが、さすがに新型コロナ騒動では営業を自粛。

現在は、160人の入場定員を半分に制限し、営業日数も減らして感染対策を万全にしているが、こういったライブハウスは大勢の入場者が密になって、生バンドの音楽をバックに、歌ったり踊ったりするのが楽しいもの。早く、コロナ騒動

が収束して通常の状態を楽しみたいものだ。



店内のステージ風景を伝える看板

文 鈴木源柱